

2サムエル記13-15章 「ダビデの家の剣」

1A 嫉のない息子たち 13

1B 強姦 1-22

2B 殺人 23-39

2A 不完全な和解 14

1B 女による装い 1-24

2B 注意の引き寄せ 25-33

3A 息子の謀反 15

1B 人気集めの王 1-12

2B ダビデの逃亡 13-37

1C 忠誠を誓う者たち 13-23

2C 知恵を使う者たち 24-37

本文

サムエル記第二 13 章を開いてください。13 章からの話は、ナタンがダビデに語った次の言葉の実現になっていきます。「今や剣は、いつまでもあなたの家から離れない。あなたがわたしをさげすみ、ヘテ人ウリヤの妻を取り、自分の妻にしたからである。(12:10)」ダビデがバテ・シェバと姦淫の罪を犯し、そして彼女の夫ウリヤを殺したことによって、ダビデの家に剣が入ってくるようになります。彼はこれまで、恵みによって生きてきました。自分を追っていたサウルに手を出すことをせず、サウルの家メフィボシェテに恵みを施し、また神が自分を恵んでくださったように、人々にも恵みを与えていたのです。ところが、自分の欲によって他者の妻を奪い取りました。「さばいてはいけません。さばかれないためです。」とイエス様が言われましたが、自分の手で神の領域に入れば、それはそのまま自分に降りかかってきます。

1A 嫉のない息子たち 13

1B 強姦 1-22

13:1 その後のことである。ダビデの子アブシャロムに、タマルという名の美しい妹がいたが、ダビデの子アムノンには彼女を恋していた。13:2 アムノンは、妹タマルのために、苦しんで、わずらうようになった。というのは、彼女が処女であって、アムノンには、彼女に何かするということはとてもできないと思われたからである。

「その後」というのは、ダビデがバテ・シェバを妻にして、初めの子が死んで、それからソロモンを生んだ後の話です。また、アモン人を征服することに成功した後のことです。「アブシャロム」という息子がダビデにいました。彼は、ゲシエルの王の娘とダビデとの間に出来た子で三男です。彼に妹がいて、タマルと言いました。そして長男には、イスラエル人アヒノアムの子であるアムノンがい

ました(2サムエル 3:2-3 参照)。通常であれば、彼がダビデの後を継ぐこととなります。

アムノンは彼女を恋していましたが、「処女」だから何もすることはとてもできないとあります。当時、処女は同性の間で堅く守られていました。親戚でさえ、安易に近づくことは許されていませんでした。それでどうすることもできない、と思ったのです。そしてもちろん、この恋は神の律法にも反しています。たとえ母親が違う人でも、彼女は姉妹であり、その裸を見てはいけないと、レビ記 20 章 17 節に書いてあります。

13:3 アムノンには、ダビデの兄弟シムアの子でヨナダブという名の友人がいた。ヨナダブは非常に悪賢い男であった。13:4 彼はアムノンに言った。「王子さま。あなたは、なぜ、朝ごとにやつれていくのか、そのわけを話してくれませんか。」アムノンは彼に言った。「私は、兄弟アブシャロムの妹タマルを愛している。」13:5 ヨナダブは彼に言った。「あなたは床に伏せて、仮病を使いなさい。あなたの父君が見舞いに来られたら、こう言いなさい。『どうか、妹のタマルをよこして、私に食事をさせ、私に見えるように、この目の前で病人食を作らせてください。タマルの手から、それを食べたいのです。』」

悪い友からは離れなければいけません。「思い違いをしてはいけません。友だちが悪ければ、良い習慣が損なわれます。(1コリント 15:33)」

13:6 そこでアムノンは床につき、仮病を使った。王が見舞いに来ると、アムノンは王に言った。「どうか、妹のタマルをよこし、目の前で二つの甘いパンを作らせてください。私は彼女の手から食べたいのです。」13:7 そこでダビデは、タマルの家の人をやって言った。「兄さんのアムノンの家に行って、病人食を作ってあげなさい。」

神の御心にかなう男と呼ばれたダビデには、他の男たちにもある弱さがありました。それは、「息子を甘やかした」ことがあります。アムノンの甘ったれた願いをダビデがそのまま聞いてあげています。列王記第一 1 章において、ダビデの子アドニヤが王になろうと野心を抱いたことが書かれています。1 章 6 節には、「…彼の父は存命中、「あなたはどのようにこんなことをしたのか。」と言って、彼のことで心を痛めたことがなかった。」とあります。かつて、サムエルを育てた祭司エリも同じように、神よりも息子を重んじたことで、息子が邪悪な行ないをそのままにしてしまっていたばかりに、神に裁かれました。

なぜ、こうになってしまうのか？彼には妻がたくさんいすぎた、そして息子がたくさんいすぎたからです。王としての地位に、当時は妻が多すぎることは当たり前でした。けれども、そこには真実な夫婦の関係、また親子の関係が築き上げにくいという弱さがあります。男は業績や仕事において情熱を注ぐことはできますが、その中で自分を孤独にさせていってしまうという弱さを持っています。けれども、妻には自分のからだのように愛し、息子には、主にあって教育するという命令が父には

神から与えられています。けれども、それをできていないので罪意識となり、息子のしていることを全て受け入れるという甘やかしをしてしまうのです。

13:8 それでタマルが兄アムノンの家に行ったところ、彼は床についていた。彼女は粉を取って、それをこね、彼の目の前で甘いパンを作って、それを焼いた。13:9 彼女は平なべを取り、彼の前に甘いパンを出したが、彼は食べようとしなかった。アムノンが、「みな、ここから出て行け。」と言ったので、みなアムノンのところから出て行った。13:10 アムノンはタマルに言った。「食事を寝室に持って来ておくれ。私はおまえの手からそれを食べたい。」タマルは自分が作った甘いパンを兄のアムノンの寝室に持って行った。13:11 彼女が食べさせようとして、彼に近づくと、彼は彼女をつかまえて言った。「妹よ。さあ、私と寝ておくれ。」13:12 彼女は言った。「いけません。兄上。乱暴してはいけません。イスラエルでは、こんなことはしません。こんな愚かなことをしないでください。13:13 私は、このそしりをどこに持って行けましょう。あなたもイスラエルで、愚か者のようになるのです。今、王に話してください。きっと王が私をあなたに会わせてくださいます。」

タマルの言うとおりです。このような陵辱は、イスラエルの歴史の中ではエジプトやカナン人の間でしか見ませんでした。ヨセフが仕えていたエジプトのパロの廷臣ポティファルの妻が、人々を部屋から出して、「私と寝ておくれ」とヨセフに言いました。また、カナン人の住むシケムで、ヤコブの娘ディナが、その町の長の息子に陵辱されました。

そして彼女は、王によって見合いをすればよいではないか、と言って、この場を何とかして回避しようとします。この世の価値観では、どうせ男と女が共に寝ることには変わりないから、結婚前に寝ても良いではないか、ということになります。けれども男女関係において、「待つ」という品位が培われていきます。アムノンの問題は、「待たない」ということでした。私たちキリスト者は、信仰と愛によって、願っているものを忍耐して望みます。けれども肉の欲望は、たった今それが欲しいと要求します。

13:14 しかし、アムノンは彼女の言うことを聞こうとはせず、力づくで、彼女をはずかしめて、これと寝た。13:15 ところがアムノンは、ひどい憎しみにかられて、彼女をきらった。その憎しみは、彼がいただいた恋よりもひどかった。アムノンは彼女に言った。「さあ、出て行け。」

彼の恋は、彼女への愛ではなく自分自身への愛でした。エペソ人への手紙 5 章には、興味深い勧めがあります。「また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。あなたがたの間では、聖徒にふさわしく、不品行も、どんな汚れも、またむさぼりも、口にすることさえいけません。(2-3 節)」使徒パウロは、愛のうちに歩みなさいと勧めたその直後で、不品行やむさぼりは、それを口にすることさえしてはいけなさと戒めています。つまり、不品行や貪りは、愛からかけ離れたもの、いや正反対のものであるとすることができます。

13:16 彼女は言った。「それはなりません。私を追い出すなど、あなたが私にしたあのことより、なおいっそう、悪いことです。」しかし、彼は彼女の言うことを聞こうともせず、13:17 召使の若い者を呼んで言った。「この女をここから外に追い出して、戸をしめてくれ。」13:18 彼女は、そでつきの長服を着ていた。昔、処女である王女たちはそのような着物を着ていたからである。召使は彼女を外に追い出して、戸をしめてしまった。

律法の中には、処女を辱めた時は、彼女の父に多額の花嫁料を支払い、彼女を娶らなければいけない、離縁することは決して出来ないと戒められています(申命記 22:28-29)。けれども、アムノンはそれを無視して、このことは一切なかったことにしようとしてしまいました。

13:19 タマルは頭に灰をかぶり、着ていたそでつきの長服を裂き、手を頭に置いて、歩きながら声をあげて泣いていた。13:20 彼女の兄アブシャロムは彼女に言った。「おまえの兄アムノンが、おまえといっしょにいたのか。だが妹よ。今は黙っていなさい。あれはおまえの兄なのだ。あのことで心配しなくてもよい。」それでタマルは、兄アブシャロムの家で、ひとりわびしく暮らしていた。

ユダヤ人は、自分の感情を身振りや着ている物を使って大きく表現しますが、タマルも例外ではありませんでした。そして彼女は、夫を新たに得ることができないだけでなく、イスラエル人の間で恥を負ってしまったので、兄アブシャロムのところでわびしく暮らしました。

13:21 ダビデ王は、事の一部始終を聞いて激しく怒った。13:22 アブシャロムは、アムノンにこのことが良いとも悪いとも何も言わなかった。アブシャロムは、アムノンが妹タマルをはずかしめたことで、彼を憎んでいたからである。

ダビデ王は、激しく憤っただけで、アムノンに対して何ら戒めを与えることをしませんでした。これは致命的であります。父として懲らしめを与えないことは、息子の人格形成に大きな歪みをもたらします。人には、境界線が必要です。良い物と悪い物を見分ける感覚の訓練が必要です。それがないと、その人の魂に自我と欲が膨張することになります。

戒めを受けなかったアムノンは、そのまま独りよがりの甘えん坊のまま生きていきました。そしてアブシャロムには怒りと憎しみが募っていきました。ダビデが懲らしめを与えなかったことによって、正義が行なわれていないので、その悪い思いが心に募っていったのです。そして、アブシャロム自身、甘えられて育っていました。彼は、その怒りを制御することなく余すところなく発散し、しかも計画的に事を行なっていくのです。

2B 殺人 23-39

13:23 それから満二年たって、アブシャロムがエフライムの近くのバアル・ハツォルで羊の毛の刈り取りの祝いをしたとき、アブシャロムは王の息子たち全部を招くことにした。

羊の毛の刈り取りの祝いは、大きなお祭りでした。覚えていますが、ナバルが羊の毛の刈り取りの祝いの時に、王のような大きな宴会を開いていたとありましたね(1サムエル 25:36)。

13:24 アブシャロムは王のもとに行って言った。「このたび、このしもべが羊の毛の刈り取りの祝いをするようになりました。どうか、王も、あなたの家来たちも、このしもべといっしょにおいでください。」13:25 すると王はアブシャロムに言った。「いや、わが子よ。われわれ全部が行くのは良くない。あなたの重荷になってはいけないから。」アブシャロムは、しきりに勧めたが、ダビデは行きたがらず、ただ彼に祝福を与えた。13:26 それでアブシャロムは言った。「それなら、どうか、私の兄弟アムノンを私どもといっしょに行かせてください。」王は彼に言った。「なぜ、彼があなたといっしょに行かなければならないのか。」13:27 しかし、アブシャロムが、しきりに勧めたので、王はアムノンと王の息子たち全部を彼といっしょに行かせた。

王や家来が共に付いていけば、それなりの大きなもてなしになるので、息子アブシャロムに負担になるとダビデは思いました。常識的にはその通りなのですが、けれどもアブシャロムは目立つこと、大げさなことが好きな人間になっていました。このことによって、父親の愛情を得ようとしていたのであろうと思われまます。ダビデは、息子からの最後の声も無視してしまったのです。けれどもアブシャロム本人も、父が共に付いてくるような人ではないと計算済みだったのでしょう。そこでアムノン殺人計画を実行します。

13:28 アブシャロムは自分に仕える若い者たちに命じて言った。「よく注意して、アムノンが酔って上ぎげんになったとき、私が『アムノンを打て。』と言ったら、彼を殺せ。恐れてはならない。この私が命じるのではないか。強くあれ。力ある者となれ。」13:29 アブシャロムの若い者たちが、アブシャロムの命じたとおりにアムノンにしたので、王の息子たちはみな立ち上がって、おのおの自分の騾馬に乗って逃げた。

今度は自分の番ではないかと恐れて逃げました。

13:30 彼らがまだ道の途中にいたとき、ダビデのところに次のような知らせが着いた。「アブシャロムは王の子たちを全部殺しました。残された方はひとりもありません。」13:31 そこで王は立ち上がり、着物を裂き、地に伏した。かたわらに立っていた家来たちもみな、着物を裂いた。13:32 しかしダビデの兄弟シムアの子ヨナダブは、証言をして言った。「王さま。彼らが王の子である若者たちを全部殺したとお思いなさいませぬように。アムノンだけが死んだのです。それはアブシャロムの命令によるので、アムノンが妹のタマルをはずかしめた日から、胸に持っていたことです。13:33 今、王さま。王子たち全部が殺された、という知らせを心に留めないでください。アムノンだけが死んだのです。」

このような大きな事件が起こりますと、情報はしばしば錯綜します。けれども、悪知恵をかつて吹

き込んだヨナダブは、内部事情を知っているのでそれを王に伝えます。

13:34 一方、アブシャロムは逃げた。見張りの若者が目を上げて見ると、見よ、彼のうしろの山沿いの道から大ぜいの人々がやって来るところであった。13:35 ヨナダブは王に言った。「ご覧ください。王子たちが来られます。このしもべが申し上げたとおりになりました。」13:36 彼が語り終えたとき、そこに王子たちが来て、声をあげて泣いた。王もその家来たちもみな、非常に激しく泣いた。

剣が、ダビデ家に入りました。アムノンのことも考えると、不品行も殺人も、ダビデが行なったことがそのまま息子たちに鏡のように写し出されていきました。この言葉を忘れてはいけません。「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。(ガラテヤ 6:7-8)」

13:37 アブシャロムは、ゲシュルの王アミフデの子タルマイのところに逃げた。ダビデは、いつまでもアムノンの死を嘆き悲しんでいた。13:38 アブシャロムは、ゲシュルに逃げて行き、三年の間そこにいた。13:39 ダビデ王はアブシャロムに会いに出ることはやめた。アムノンが死んだので、アムノンのために悔やんでいたからである。

ダビデには息子への愛情がありました。だから、彼はいつまでもアムノンの死を嘆き悲しんでいました。けれども彼が知らなければいけなかったのは、躰けないということは愛していないということです。「父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。(ヘブル 12:7-8)」

そして、アブシャロムはゲシュルに逃げました。ゲシュルはガリラヤ湖の北東の部分、ゴラン高原にありました。自分の母がゲシュルの王の娘なのでそこに逃げたのです。

そして 39 節ですが、新改訳のみがこのような訳を施しています。実際はその反対のことが書かれています。新共同訳ではこうなっています。「アムノンの死をあきらめた王の心は、アブサロムを求めていた。」アムノンについてダビデは三年間泣き悲しみましたが、その死を現実として受け入れました。それで心がアブシャロムに向き始めた、ということです。

2A 不完全な和解 14

けれども、ダビデはアブシャロムに対して積極的に和解の手を差し伸ばそうとはしませんでした。彼は、心はあっても、それを決断して行動に移すことをしなかったのです。そこで家来のヨアブが、知恵を働かせます。

1B 女による装い 1-24

14:1 ツェルヤの子ヨアブは、王がアブシャロムに敵意をいただいているのに気づいた。

ここの箇所も、他の訳と異なります。新共同訳では、「王の心がアブサロムに向かっていることを悟り」となっています。

14:2 ヨアブはテコアに人をやって、そこからひとりの知恵のある女を連れて来て、彼女に言った。「あなたは喪に服している者を装い、喪服を着て、身に油も塗らず、死んだ人のために長い間、喪に服している女のようになって、14:3 王のもとに行き、王にこのように話してくれまいか。」こうしてヨアブは彼女の口にことばを授けた。

かつて、ナバルの妻アビガイルが、ナバルの家の者を木端微塵に殺そうとして近づいていたダビデに、知恵をもって執り成したのと同じように、知恵のある女をテコアから連れてきました。テコアは、エルサレムから南に数キロ離れたところにあります。

14:4 テコアの女は、王に話したとき、地にひれ伏し、礼をして言った。「お救いください。王さま。」
14:5 それで、王は彼女に言った。「いったい、どうしたのか。」彼女は答えた。「実は、この私は、やもめで、私の夫はなくなりました。14:6 このはしためには、ふたりの息子がいましたが、ふたりが野原でけんかをして、だれもふたりを仲裁する者がいなかったので、ひとりが相手を打ち殺してしまいました。14:7 そのうえ、親族全体がこのはしために詰め寄って、『兄弟を打った者を引き渡せ。あれが殺した兄弟のいのちのために、あれを殺し、この家の世継ぎをも根絶やしにしよう。』と申します。あの人たちは残された私の一つの火種を消して、私の夫の名だけではなく、残りの者までも、この地上に残さないようにするのです。」14:8 王は女に言った。「家に帰りなさい。あなたのこと命令を出そう。」

当時は裁判が行なわれていましたが、そこで自分たちの窮状が届けられないと感じた場合は、このように王のところに直訴していました。そこで彼女は、律法に関わる問題を訴えています。かつて、人を殺した時は殺された者の家族や親戚が復讐するというのが慣わしでした。故意ではなく事故で人を殺してしまった人が、そうした復讐の血から守られるように、神は逃れの町を備えてなさいと命じられましたが、ここでは意図的な殺人なので逃れの町にも逃げられません。

けれども、そうするともっと大変な問題が起こります。その家族の名が絶たれてしまう、という問題です。覚えていますか、イスラエルの名が絶えることのないように、貧しい者が売ってしまった土地を近親者が買い戻しなさいと主は命じられました。そして彼女自身の問題もあります。彼女はやもめであり、生きている息子が殺されたら自分が生きていくこともままなりません。ここには知恵が必要になりますが、ダビデはそれを行ないました。現代の言葉でいえば、「政治的判断」でしょうか。ダビデは、親族の復讐からその息子を守るための措置を取ることを約束しました。

14:9 テコアの女は王に言った。「王さま。刑罰は私と私の父の家に下り、王さまと王位には罪がありませんように。」14:10 王は言った。「あなたに文句を言う者がいるなら、その者を、私のところに連れて来なさい。そうすれば、もう二度とあなたを煩わすことはなくなる。」14:11 そこで彼女は言った。「どうか王さま。あなたの神、主に心を留め、血の復讐をする者が殺すことをくり返さず、私の息子を根絶やしにしないようにしてください。」王は言った。「主は生きておられる。あなたの息子の髪の毛一本も決して地に落ちることはない。」

女はダビデに、息子を救い出すという強い意志を引き出すことに成功しました。

14:12 するとその女は言った。「このはしために、一言、王さまに申し上げさせてください。」王は言った。「言いなさい。」14:13 女は言った。「あなたはどうして、このような神の民に逆らうようなことを、計られたのですか。王は、先のようなことを語られて、ご自分を罪ある者とされています。王は追放された者を戻しておられません。14:14 私たちは、必ず死ぬ者です。私たちは地面にこぼれて、もう集めることのできない水のようなものです。神は死んだ者をよみがえらせてはくさいません。どうか追放されている者を追放されたままにしておかないように、ご計画をお立てください。」

女はかつて、ナタンがダビデに行なったのと同じような手法を使いました。つまり、たとえ話を使って、その判断をそのままダビデ本人に突きつけるのです。今、アブシャロムが追放されたままです。アムノンがいなくなり、これではアブシャロムも死んだも同然です。そしてヨアブは、この不和が続けば、アブシャロムが何かしでかしやしないかという不安もあったでしょう。自分の主人ダビデの国に不安定な要素になると思って、女を使う計画を立てたのです。

14:15 今、私が、このことを王さまにお話しにまいりましたのも、人々が私をおどしたからです。それで、このはしためは、こう思いました。『王さまにお話ししてみよう。王さまは、このはしための願いをかなえてくださるかもしれない。14:16 王さまは聞き入れて、私と私の子を神のゆずりの地から根絶やしにしようとする者の手から、このはしためをきつと助け出してくさるでしょうから。』14:17 それで、このはしためは、『王さまのことばは私の慰めとなろう。』と思いました。王さまは、神の使いのように、善と悪とを聞き分けられるからです。あなたの神、主が、あなたとともにおられますように。」

やめめのことであれば、このように憐れみを示すことができるのに、自分自身の息子にも同じようにしなければいけないのではないか？という問いかけです。

14:18 すると、王はこの女に答えて言った。「私が尋ねることを、私に隠さず言ってくれ。」女は言った。「王さま。どうぞおっしゃってください。」14:19 王は言った。「これは全部、ヨアブの指図によるのであろう。」女は答えて言った。「王さま。あなたのたましいは生きておられます。王さまが言われることから、だれも右にも左にもそれることはできません。確かにあなたの家来ヨアブが私に命

じ、あの方がこのはしための口に、これらすべてのことばを授けたのです。14:20 あなたの家来ヨアブは、事の成り行きを変えるために、このことをしたのです。あなたさまは、神の使いの知恵のような知恵があり、この地上のすべての事をご存じですから。」

ダビデは、ヨアブのことをよく知っています。下手な演技はすぐにばれました。

14:21 それで、王はヨアブに言った。「よろしい。その願いを聞き入れた。行って、若者アブシャロムを連れ戻しなさい。」14:22 ヨアブは地にひれ伏して、礼をし、王に祝福のことばを述べて言った。「きょう、このしもべは、私があなただのご好意にあずかっていることがわかりました。王さま。王さまはこのしもべの願いを聞き入れてくださったからです。」14:23 そこでヨアブはすぐゲシュルに出かけて行き、アブシャロムをエルサレムに連れて来た。14:24 王は言った。「あれは自分の家に引きこもっていなければならない。私の顔を見ることはならぬ。」それでアブシャロムは家に引きこもり、王の顔を見なかった。

ヨアブの仲介は、うまく行きませんでした。遠くにいるよりも、近くにおいて顔を合せないほうがよっぽど厳しい仕打ちです。ダビデの心は、甘やかしから厳しさに大きく振り子が動いています。これまでアムノンにも、またアブシャロムにも何も行なわなかったために、あまりにも強く彼に臨んでいます。

2B 注意の引き寄せ 25-33

14:25 さて、イスラエルのどこにも、アブシャロムほど、その美しさをほめはやされた者はいなかった。足の裏から頭の頂まで彼には非の打ちどころがなかった。14:26 彼が頭を刈るとき、..毎年、年の終わりには、それが重いので刈っていた。..その髪の毛を量ると、王のはかりで二百シェケルもあった。14:27 アブシャロムに三人の息子と、ひとりの娘が生まれた。その娘の名はタマルといて非常に美しい娘であった。

アブシャロムは、かつてのサウルと同じように容姿に優れていました。それで次の章における、アブシャロムの人気の一因となっています。また彼自身はその容姿のゆえに、うぬぼれが強くなりました。けれども、哀れな人生を歩むこととなります。二百シェケル、約二キロもある髪の毛は、後に自分が殺されるために用いられることとなります。

さらに娘に、自分の妹と同じ名を付けました。妹のことを娘に投影させています。それだけ妹のことを考えていました。

14:28 アブシャロムは二年間エルサレムに住んでいたが、王には一度も会わなかった。14:29 それで、アブシャロムは、ヨアブを王のところに遣わそうとして、ヨアブのもとに人をやったが、彼は来ようとしなかった。アブシャロムはもう一度、人をやったが、それでもヨアブは来ようとはしなかった。

14:30 アブシャロムは家来たちに言った。「見よ。ヨアブの畑は私の畑のそばにあり、そこには大麥が植えてある。行ってそれに火をつけよ。」アブシャロムの家来たちは畑に火をつけた。14:31するとヨアブはアブシャロムの家にやって来て、彼に言った。「なぜ、あなたの家来たちは、私の畑に火をつけたのですか。」14:32 アブシャロムはヨアブに答えた。「私はあなたのところに人をやり、ここに来てくれ、と言わせたではないか。私はあなたを王のもとに遣わし、『なぜ、私をゲシュルから帰って来させたのですか。あそこにとどまっていたほうが、まだ、ましでしたのに。』と言ってもらいたかったのだ。今、私は王の顔を拝したい。もし私に咎があるなら、王に殺されてもかまわない。」

注意を引くために、こんな手段しか取れなかったアブシャロムは哀れです。彼には、自分が悪いことをしたという意識がありません。アムノンが妹を強姦した時に父は何ら必要な措置を取らなかった。そして自分が正義を執行した時に父は自分を追放した。こうした、いらだちに満たされていました。けれども、彼はしてはいけないことと、してよいことの見境が付いていませんでした。

14:33 それで、ヨアブは王のところに行き、王に告げたので、王はアブシャロムを呼び寄せた。アブシャロムは王のところに来て、王の前で地にひれ伏して礼をした。王はアブシャロムに口づけした。

ゲシュルに三年間、そしてエルサレムで二年間、合計五年後に、ようやくアブシャロムは父の顔を見ることができました。ダビデもアブシャロムに口づけしています。これで和解が成立したかのように見えます。けれども、無理やり注意を引き寄せる形での和解によって、アブシャロムの心は父に開いていませんでした。むしろ、憎しみがますます大きくなっていきました。そこで次のとんでもない行動に出ます。

3A 息子の謀反 15

1B 人気集めの王 1-12

15:1 その後、アブシャロムは自分のために戦車と馬、それに自分の前を走る者五十人を手に入れた。

五十人の者を前に走らせても、人数が少なすぎて戦いなどできません。これはあくまでも見世物のためであります。

15:2 アブシャロムはいつも、朝早く、門に通じる道のそばに立っていた。さばきのために王のところに来て訴えようとする者があると、アブシャロムは、そのひとりひとりを呼んで言っていた。「あなたはどこの町の者か。」その人が、「このしもべはイスラエルのこれこれの部族の者です。」と答えると、15:3 アブシャロムは彼に、「ご覧。あなたの訴えはよいし、正しい。だが、王の側にはあなたのことを聞いてくれる者はいない。」と言い、15:4 さらにアブシャロムは、「ああ、だれかが私をこ

の国のさばきつかさに立ててくれたら、訴えや申し立てのある人がみな、私のところに来て、私がその訴えを正しくさばくのだが。」と言っていた。15:5 人が彼に近づいて、あいさつしようとする、彼は手を差し伸べて、その人を抱き、口づけをした。15:6 アブシャロムは、さばきのために王のところに来るすべてのイスラエル人にこのようにした。こうしてアブシャロムはイスラエル人の心を盗んだ。

アブシャロムは、非常に巧みに人々の心を父から引き離しました。彼の行動は、まるで人気取りの政治家のようです。人々の心に、不満を抱かせています。直接的にはダビデを批判していませんが、ダビデへの信頼を失わせるように仕向けています。また自分のほうが正しい判断が出来ているように見せています。人々の苦境を利用して、その苦しみを和らげるふりをしています。

15:7 それから四年たって、アブシャロムは王に言った。「私が主に立てた誓願を果たすために、どうか私をヘブロンへ行かせてください。15:8 このしもべは、アラムのゲシュルにいたときに、『もし主が、私をほんとうにエルサレムに連れ帰ってくださるなら、私は主に仕えます。』と言って誓願を立てたのです。」15:9 王が、「元気で行って来なさい。」と言ったので、彼は立って、ヘブロンへ行った。

彼が次に行ったのは、霊的な装いをすることです。いけにえを捧げるため、と言って、礼拝の名を使って父に反逆する用意をしています。アブシャロムの姿はまさに分派を作る人のそれと同じです。分派を作る人は、自分が分派を作っていると思いません。「自分たちは正しいことのために動かなければいけない。」と思っています。そして、「指導者が間違っただけを正すために、周りの人々にも働きかけ、また指導者がいかに誤っているかも説得していかなければいけない。」と熱心になっています。

このような考えの根本的な過ちは二つあります。一つは、「自分が正しい」と思いこんでいることです。「人の怒りは、神の義を実現するものではありません。(ヤコブ 1:20)」とあるように、自分の正しさを持ちだすと神の義と対立することになります。そして自分の正しさを追及すれば、その交わりは破壊します。正しさではなく、愛また受け入れが交わりと一致には必要なのです。もう一つの間違ひは、自分自身で成し遂げなければいけないと考えていることです。自分で、また自分たちで何かを作りあげなければいけないと思っています。これは、一見霊的な装いをしているのですが、極めて人間中心であり、御霊と愛の一致に最も大きな害を与えます。

15:10 そのとき、アブシャロムはイスラエルの全部族に、ひそかに使いを送って言った。「角笛の鳴るのを聞いたら、『アブシャロムがヘブロンで王になった。』と言いなさい。」15:11 アブシャロムは二百人の人々を連れてエルサレムを出て行った。その人たちはただ単に、招かれて行った者たちで、何も知らなかった。

アブシャロムは、ダビデの王座を転覆させるために、自分を支持している人々がいることを見せる必要があると感じました。これも、自分の味方に人々を引き寄せようとする時の行動です。ある人を貶めるために、「この人たちも、私のことを支持している。」と言って、相手に圧力をかけようとするのです。

15:12 アブシャロムは、いけにえをささげている間に、人をやって、ダビデの議官をしているギロ人アヒトフェルを、彼の町ギロから呼び寄せた。この謀反は根強く、アブシャロムにくみする民が多くなった。

アブシャロムとはまた少し違った形で、ダビデに苦みを持っている人物がいました。アヒトフェルです。バテ・シェバは、アヒトフェルの孫娘になります(23:24)。バテ・シェバに対してダビデが行なったことに苦みを持っていたと考えられます。

こうしてアブシャロムにくみする民が多くなりましたが、数少ないですがダビデに付いていく人々もいます。このような状況になって初めて、本当はどちらに自分は忠誠を誓っているのか明らかにされます。

2B ダビデの逃亡 13-37

1C 忠誠を誓う者たち 13-23

15:13 ダビデのところ告げる者が来て、「イスラエル人の心はアブシャロムになびいています。」と言った。15:14 そこでダビデはエルサレムにいる自分の家来全部に言った。「さあ、逃げよう。そうでないと、アブシャロムからののがれる者はなくなるだろう。すぐ出発しよう。彼がすばやく追いついて、私たちに害を加え、剣の刃でこの町を打つといけないから。」

ダビデは、エルサレムで流血の惨事が起こることを避けたいと願いました。もし彼が王座を固持してアブシャロムと戦ったのなら、王座は保持できたとしても、相手を傷つけ、また自分を傷つけてしまいます。かつてアブラハムが、ロトに譲歩した時のことを思い出してください。土地が狭くて羊飼いの言い争いが酷くなってきた時に、おじのアブラハムがロトに、「あなたが住む土地を選びなさい」と言いました。争いよりも平和を願うため、自分の持っている権利を敢えて用いないのです。

15:15 王の家来たちは王に言った。「私たち、あなたの家来どもは、王さまの選ばれるままにいたします。」15:16 こうして王は出て行き、家族のすべての者も王に従った。しかし王は、王宮の留守番に十人のそばめを残した。15:17 王と、王に従うすべての民は、出て行って町はずれの家にとどまった。

王の家来また家族の者たちは、王に従いました。そして王は、側め十人を王宮に残しました。おそらく家のことの世話をしてほしいと願ったのでしょう。けれども彼女たちと、アブシャロムが寝るこ

とになります。

15:18 王のすべての家来は、王のかたわらを進み、すべてのケレテ人と、すべてのペレテ人、それにガテから王について来た六百人のガテ人がみな、王の前を進んだ。15:19 王はガテ人イタイに言った。「どうして、あなたもわれわれといっしょに行くのか。戻って、あの王のところにとどまりなさい。あなたは外国人で、それに、あなたは、自分の国からの亡命者なのだから。15:20 あなたは、きのう来たばかりなのに、きょう、あなたをわれわれといっしょにさまよわせるに忍びない。私はこれから、あてどもなく旅を続けるのだから。あなたはあなたの同胞を連れて戻りなさい。恵みとまことが、あなたとともにあるように。」15:21 イタイは王に答えて言った。「主の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためでも、死ぬためでも、しもべも必ず、そこにいます。」15:22 ダビデはイタイに言った。「それでは来なさい。」こうしてガテ人イタイは、彼の部下全部と、いっしょにいた子どもたち全部とを連れて、進んだ。

イスラエル人にダビデに謀反を働く者がたくさんいたのに対して、驚くことに異邦人なのにダビデに忠誠を誓う人々がいました。「ケレテ人」はペリシテ人系の人々です。そしてガテ人は、まさにペリシテ人の町ガテであり、ダビデがかつて仕えた王アキシュの町であります。おそらく彼らは、ガテにいたころのダビデの姿を見ていたのでしょう。そして、ダビデがペリシテ人を屈服させてからの、ダビデの統治を見ていたのでしょう。それで、これらガテ人はダビデに忠誠を誓いたいと願い、亡命してきたのでした。

ところが、亡命してきたかと思うと、その政権がすぐになくなったのです。これはついていません。ダビデは同胞の民のところに戻りなさい、また再びガテの王に仕えなさいと進めます。これはちょうど、ルツ記のナオミの言葉のようです。嫁のオルパとルツに対して、自分の民と神のところに戻りなさいと強く勧めました。彼女たちは若くしてやもめになってしまったのです。ですから、これらガテ人がダビデについていく理由がありません。けれども、イタイは「主の前に誓います」と言って、忠誠を誓います。自分の命をかけて仕えることを宣言しています。なんとすばらしい忠誠心でしょうか！

ダビデの子キリストに対しても、同じように多くの人が二つに分れました。主が弟子となってついて来なさいと言われた時は、大勢の人々がついて行きました。けれども、この方が十字架について語り始めると、一気に人が少なくなりました。けれども、それでも残っていた弟子たちがいました。「イエスは十二弟子に言われた。『まさか、あなたがたも離れたいと思うのではないでしょう。』すると、シモン・ペテロが答えた。『主よ。私たちがだれのところに行きましょう。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。』(ヨハネ 6:67-68)」イスカリオテのユダは例外ですが、十二弟子たちは、たとえイエス様の道が険しくても、他のところには永遠のいのちの言葉はないことを知っていました。今は自分たちに不利なこと、困難があっても、その道に戻ることに伴う空しさは二度と味わいたくないと思っていました。だから、付いてきたのです。

ダビデはキリストとは異なり罪を犯してこうなっていますが、けれどもダビデに付いて行っている者たちは、ダビデに約束されている神を信じてついて行っているのです。ダビデがイスラエルの王であることを知って付いて行っています。かの日には大きな将来が約束されているだけでなく、今の時代にも必ず報いがあることを信頼しています。

キリストについて行くことによる損失は、この世の与える栄光よりも優れています。「まことに、あなたの大庭にいる一日は千日にまさります。私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです。(詩篇 84:10)」主ご自身も弟子たちにこう言われました。「まことに、あなたがたに告げます。わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、その百倍を受けない者はありません。今のこの時代には、家、兄弟、姉妹、母、子、畑を迫害の中で受け、後の世では永遠のいのちを受けます。(マルコ 10:29-30)」

対してアブシャロムについて行く者たちは、一時的な栄光に預かるかもしれませんが、その後は悲惨です。私たちの道にも、アヒトフェルのように苦みが心に入ってくるかもしれません。怒りかもしれません。その他の肉の思いかもしれません。それが支配することを選び取るならば、一時的に満足できるかもしれませんが、自分を滅びへと向かわしめていることになっているのです。

15:23 この民がみな進んで行くとき、国中は大きな声をあげて泣いた。王はキデロン川を渡り、この民もみな、荒野のほうへ渡って行った。

エルサレムとオリーブ山の間にキデロンあるいはケデロンの谷があります。そこを渡って、オリーブ山を越えると、そこはユダの荒野の始めです。そこを進んでアブシャロムの手から逃れようとしています。

2C 知恵を使う者たち 24-37

15:24 ツアドクも、すべてのレビ人と一しょに、神の契約の箱をかついでいたが、神の箱をそこに降ろした。エブヤタルも来て、民が全部、町から出て行ってしまいうまでいた。15:25 王はツアドクに言った。「神の箱を町に戻しなさい。もし、私が主の恵みをいただくことができれば、主は、私を連れ戻し、神の箱とその住まいとを見せてくださろう。15:26 もし主が、『あなたはわたしの心になわない。』と言われるなら、どうか、この私に主が良いと思われることをしてください。」

午前礼拝で学びましたように、神の箱はエルサレムにあるべきで、御心にかなうのであればここに戻れると、すべてを主にお任せしました。

15:27 王は祭司ツアドクにまた言った。「先見者よ。あなたは安心して町に帰りなさい。あなたがたのふたりの子、あなたの子アヒマアツとエブヤタルの子ヨナタンも、あなたがたと一しょに。15:28 よく覚えていてもらいたい。私は、あなたがたから知らせのことばが来るまで、荒野の草原で、しば

らく待とう。」15:29 そこで、ツアドクとエブヤタルは神の箱をエルサレムに持ち帰り、そこにとどまっていた。

ダビデは、エルサレムに留まる祭司とその息子を、荒野にいる自分に伝言する者として使おうとしています。

15:30 ダビデはオリーブ山の坂を登った。彼は泣きながら登り、その頭をおおい、はだしで登った。彼といっしょにいた民もみな、頭をおおい、泣きながら登った。15:31 ダビデは、「アヒトフェルがアブシャロムの謀反に荷担している。」という知らせを受けたが、そのとき、ダビデは言った。「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」

ダビデにとって予期しなかった人物がアブシャロムについています。アヒトフェルがいかにすぐれた議官であるか、ダビデこそが知っています。その彼がアブシャロムを王として助言を続けるのであれば、ずっとエルサレムは荒らされたままになるでしょう。そこで彼は御近く、「アヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と祈りました。後でこの祈りが聞かれるようになります。

15:32 ダビデが、神を礼拝する場所になっていた山の頂に来た、ちょうどその時、アルキ人フシャイが上着を裂き、頭に土をかぶってダビデに会いに来た。15:33 ダビデは彼に言った。「もしあなたが、私といっしょに行くなら、あなたは私の重荷になる。15:34 しかしもし、あなたが町に戻って、アブシャロムに、『王よ。私はあなたのしもべになります。これまであなたの父上のしもべであったように、今、私はあなたのしもべになります。』と言うなら、あなたは、私のために、アヒトフェルの助言を打ちこわすことになる。15:35 あそこには祭司のツアドクとエブヤタルも、あなたといっしょにいるではないか。あなたは王の家から聞くことは何でも、祭司のツアドクとエブヤタルに告げなければならない。15:36 それにあそこには、彼らのふたりの息子、ツアドクの子アヒマアツとエブヤタルの子ヨナタンがいる。彼らをよこして、あなたがたが聞いたことを残らず私に伝えてくれ。」15:37 それで、ダビデの友フシャイは町へ帰った。そのころ、アブシャロムもエルサレムに着いた。

主の配剤のように、ちょうど良い時に友フシャイが来ました。アヒトフェルのことを聞いて、短く祈って、そうしたらアヒトフェルの代わりになるようなフシャイを神がダビデに与えてくださったのです。このフシャイが、アヒトフェルの助言を打ち壊す別の助言をすることになります。